

三浦右衛門の最後

菊池寛

青空文庫

駿河の府中から遠からぬ田舎である。天正の末年で酷い盛夏ひどの一日であった。もう十日も前から同じような日ばかりが続いていた。その炎天の下を、ここから四、五町ばかり彼方にある街道を朝から、織田勢が幾人も幾人も続いて通る。みんな盛んに汗をかいている。その汗にはほりりが付いて黒い顔がさらに黒ずんで見える。しかしこう物騒な世の中ではあるが、田の中にいて雑草を抜いたり、水車を踏んだりしている百姓は割合に落ち着いている。一つは見渡す限り略奪にありそうな農作物は一つもないからである。どんなに織田勢が意地が汚くつても、まだ花が咲いているばかりの稲を刈り取りはしまいという安心があるのと、二つには戦いくさ

さわぎに馴れきって、英国の商人たちのように *business as usual* と悟りすましていたのであった。

府中の館やかたが陥ちたという噂が昼頃伝わって来た。日中であるかはつきりは聞えなかったが、戦のさげびが聞えたり、火事の煙がほのかに見えた。お館が亡びるのだと百姓は思った。自分の家の上に覆い被さっていた大木の倒れたように明るくなったような気持もするし、なんだか残り惜しいような気持もした。しかし織田になっても武田になっても、氏うじもと元もとほどの誅ちゆうぎゆう求もとはやるまいと皆が高をくくっているのです、今川氏の盛衰を思うよりも、畔あぜに植えた枝豆の出来栄えを気にしていた。その田の中には幅半間ぐらいの道がある。道に沿うて小さい溝とびが流れていて、底はいっぱ

いの泥で、この暑さでぶくぶくと泥が幾度も湧き上った。泥鰯どじょうがいる。いもりがいる。素ほつ裸だかの子供が、五、六人も集つてがやがやいつている。それは草を罫わなにしていもりを釣つているのである。不気味な朱色をしている小さい動物はいくつも溝の中から釣り上げられては土の上に投げつけられている。投げつけられるたびに、身体をもがく勢いが弱くなって、終いにどんなに強く投げつけられてもびくともしなくなる。するとまた新しい草を引きぬいて新しい罫をこさえる。子供の群の前後には、赤い腹を白い灰のような土の中に横たえた醜みにくい小動物の死骸が、いくつもいくつもころがつている。

「高天神たかてんじんの城へはどう行くのじゃ」という鷹揚おうような声がした。

子供は皆あわてたような顔をして、その声の主人公を見た。それは十七ばかりの少年であつた。前髪を二つに分けた下から、美しい瞳が光っている。男らしさのうちに女らしさがあり、凜々しさのうちに狡滑こうかつらしさがあつた。肌に素絹しらぎぬの襦袢じゆばんを着て単衣ひとえを着ている姿は、国持大名の小姓であることを語っている。見れば、はいている白足袋はほこりで鼠色になっている。腿立ももたちを取つたために見えている右の腓こむらに一寸ばかりの傷があつて、血が絶えず流れている。

「高天神の城へはどう行くのじゃ、教えてたも」と、ややせき心になつて繰り返した。しかし子供は皆ぼかんとしている。この頃の子供は義務教育などで早熟されていないから、誰もはきはきと

物がいえない。知らねば知らぬといえはいいのだが、それがなかなかいえない。皆ほかんとしている。少年は三度間たびといを重ねた。するといちばん年かさの子供がやつと口を開いて、

「天神さんのことけえ」というた。この声をきくと若衆はちよつとでも足を止めて、きいてみたのがばからしくなつて、

「たわけ者め！」と子供たちに浴びせながら通り過ぎようとした。

ところがあいにく一人の子供が、まごまごして少年の行く手を立ちふさいだので足蹴にした。その子はよろよろめいて、溝の中へ尻餅しりもちをついてワツと泣き出した。そう痛くもなかつたようだし、裸だから着物の汚れたわけではないのだから、そんなに大きく泣く必要はないのだが、かなり大きく泣いた。子供たちは

憤然とした。この頃の子供はすべての野蛮人に共通しているように、言に怯げんにして行きよに勇ゆうなるものであった。いざ喧嘩だとなると身構えが違ってくる。蠅さそりのように少年に飛びついた。少年ははつと身をかわして腰の一刀を抜こうとした。この意志はこの場合、非常に適当であつたが、実現はせられなかつた。一人の子供が猛然として身を躍らし、柄を握つた少年の手に思い切り噛みついたからである。他の子供も最も適当な場所を攻撃したので、少年は手もなくそこへ引き据えられてしまった。子供たちは専制者を倒した革命党のように得意であつた。

少年は身をもがいて逃れようとした。しかし子供の数は十人も近い、しかも各員が皆有機的に働いているのでどうともするこ

とができない。

「奴にいもりを食わしてやるけ」と一人の子供が思いつきをいった。子供たちは皆にやりと悪意のある笑顔を交した。がそこへ一人の老人が来たので、少年はいもりを食う必要はなくなった。老人を見ると、子供は口々に声を揃えて訴えた。

「安阿弥やすあみを足蹴にしたで」というのである。

老人は、一瞥べっしてこの少年が今川の落おちゆうど人であることを知っ

た。当代の今川家には多少恨みがあった。しかしなんととっても、先代の仁政に対する感謝がどこかに残っている。その上に美しい少年で落人の身である。老人は当然子供に手込めになっているこの男に同情して、やにわに子供たちを叱り飛ばした。これは自分

の子供が他人と交渉を開いた時に、理非曲直を問わず子供を叱り飛ばす今の親たちの取る手段と同じである。少年は恥と憤りとの交じった顔付きをして起き上がった。その時には子供たちは復讐を恐れて十間も向うの丸葉柳の下へ集って逃げ支度をしていたが、村の若者が五、六人ばかりその代りに少年を取り囲んだ。いちばん前に出て少年の顔をじろじろ見ているのは、弥惣次やそうじというて落人狩りを専門にしている男である。この男は戦争があるという噂を聞くと、いつも村中から、また隣村から仲間を狩り集めて出かけて行って、どきくさまぎれに略奪をやったり、落人に槍をつけたりした。今度も出かけて行くはずであったのだが、一月ほど前に負傷をしたのが癒いえないので、今でも左の手を吊っている。彼

は先刻から少年の腰の物の値踏みをしているのだ。それは黄金作りの素晴らしい品物である。彼は今まで二、三本の太刀を泥棒したが、作りだけでも金三、四十枚に当る代物は、いまだかつて見たことがなかったのである。

少年は、そういう物騒な人間がすぐ前にいることは知らなかった。彼は目から口惜し涙を二、三滴こぼしながら声を震わせて、
やかた みうらうえもん
 「館の三浦右衛門をよくも手込めにあわせおつた」という致命フエータ的ルな独言ひとりごとをいった。

「おのしが右衛門か」

そこにいるのものは一斉に口を開いた。それほど彼の名は聞えている。彼は今川家のキャンサーだといわれている。氏うじもと元もとが豪ご

うしやゆうとう

奢遊蕩の中心は彼だといわれている。義元の時よりは二、三倍の誅求があるのも、皆彼のためだといわれている。義元よしもと恩顧おんこの忠臣が続々と退転したのも彼のためだといわれている。今川家の心ある人々は彼の名を呪っている。彼の悪評は駿河一国の隅々にまで響いている。その悪評を耳にしないのはおそらく彼自身だけであつたかも知れない。実際、右衛門にはなんの罪もないのだが、右衛門の寵ちようこう幸と今川家の退廢とが同時に起つたので、單純な世人はその前に因果關係があると思つたのである。實際彼は一人の無邪氣な少年に過ぎない。彼は十三の時に、京の西洞にしのだうい院いんに侘住居わびずまいをしていた両親の手から今川家へ兒小姓こごしやうに召し上げられたので、それ以来は、ただ主君や周圍からせられること

を受動的に甘受していただけで、自分の意志を働かしては何一つしたこともないが、氏元の彼に対する寵幸があまりに極端なので、彼が巧みに主君を操っているように見えただけである。

弥惣次は右衛門の名を聞いた時には、これは待つていたよい機会が来たと思つた。無下に剥ぎ取つては傍の者が承知しまいとさつきから手を出しかねていたのであつた。彼は急に居丈高いたけだかになつて、

「右衛門奴めならなぜ館のお供をせぬのじゃ」とののしつた。

右衛門はこれを聞いて顔色を変えた。實際彼は主君を捨てて逃げて来たのである。府中を落ちて二、三里も行つた時、彼らの一群を追いかける織田家の甲かっちゆう 冑が四、五町後の街道に光るのを

見た時に、彼は死を恐れる心よりほかの考慮は何もなかった。彼は馬に乗ることはすこぶる不得手なので、さつきから一行にしばしば乗り遅れている。もし敵に追いつかれたら、いちばん先に片付けられるのは自分でなければならぬと思うと、今にも背中に敵の槍首が突き通りそうで、生きた心持としてはなかったのである。

彼は幾度も躊躇した後、左手の林の中に馬を乗り入れるとすぐ馬を乗り放して、それから遮二無二逃げたのである。彼はこういう弱味があるので、ぐうともいえなかった。

「見せしめに剥いでしまえ」と弥惣次が怒鳴った。

これはすこぶる不当な結論ではあるが、戦国ではこのくらいな物言いがまず理屈のある方であった。三、四人の若者は右衛門に

飛びかかった。子供にさえ手込めになるのだから、今度はさらに造作がなかった。兎のように皮を剥がれた。彼の美しい肉体は六月の太陽の下にたちまち色が変わって行くほど白かった。

「右衛門なら殺してもええ」と弥惣次が怒鳴った。この頃は強い者が弱い者を殺すのは当り前のことであつた。

「百姓を苦しめたのはそいつじゃ、一締めに締めてしまえ」といった。若者の一人は、土にへたばつてゐる右衛門の首をちよつと締めてみた。右衛門は苦しがつて激しくせきをした。その時、老人はまたあわれを催した。

「命をとるまでもない。赦してやれ」といった。若者にもあまり異存はなかつた。弥惣次は一步前へ出て右の足をあげて右衛門の

肩にかけながら、

「命が惜しい。命ばかりは助けて下されといえ、いわずば赦すまいぞ」といった。右衛門は口惜し涙をぼろぼろとこぼした。若者はいかに若氣でいても、武士じゃほどに勇ゆうに勇ましい捨身の言葉を吐くかと思っていたが、右衛門は低い声で、

「命が惜しい、命ばかりは助けて下され」といった。

「頭の下げようが足りない」と弥惣次は怒鳴った。

右衛門は土につくほど頭を下げた。さつきから再び集っていた子供は一斉にわらった。

「さあ、はよう失せおれ」と二、三人に突き飛ばされて、右衛門はよろよろと立ち上った。美しい顔を泣き腫はらしながら、ただ禪ふんどしだ

けを身に纏うてとぼとぼと夕日の下を西の方へ歩いて行つた。百姓どもは皆この臆病者をあざわらつた。しかし裸で歩くことがこ
とさらに軽蔑の一原因となつたと思つてはいけない。この頃の少
年は、夏はたいてい褌一つで歩いたものであるから。

たかてんじん
高天神

の城へ右衛門の着いたのは、二日目の晩であつた。城

あまのぎようぶ

将の天野刑部が三年前に今川氏に人質になつていた時に右衛門

は数々の好意を与えてやつた。ある時刑部は、右衛門の前に両手
をついてこの御恩は生涯忘れぬというた。右衛門はその言葉を信
じて、はるばる高天神の城を頼つて来たのである。彼が城へ着い
た時は無論裸ではなかつた。彼は誰に合力を受けたのか、粗末で

あるが着物を着ていた。刑部はこの珍客の来たのを見て、いくらか興味を起したらしい。それに氏元の生死はなお不明である。もし北条と武田とが氏元に合力することがあつたならば、駿河一国を取り返すのはなんでもない。その場合には、氏元の寵ちようしん臣しんを助けた自分の位置はすこぶる有利になるだろうと考えた。右衛門も普通の人間がつくぐらゐの嘘はつくことができた。彼は乱軍の中で主人と別れ別れになつた不幸をはじめとし、世を忍ぶためにもののぐ物もの具ぐを自分で捨てた話などを、言葉巧みにした。刑部はこれを疑う材料もなかつたので、一室に請しやうじて、万一の場合、後で苦情をいわれぬくらいには歓待した。

刑部は織田と今川との中間に位しているので、欧州戦争のギリ

シヤのように、どっちへも付かずうまくやっていたのである。三浦右衛門を養いながら彼は手を回して氏元の消息を探った。ところが氏元は織田勢に追い詰められて腹を切つて死んだということがわかつた。その知らせの挿話として、氏元の寵を一身に集めた三浦右衛門は、府中落城のその日に早くも主君を捨てて逐電ちくでんしたということが添えられた。この知らせを聞いて刑部の考えついた政策はすこぶる常識的であつた。右衛門を首にして織田氏に差し出して自分の二心のないことを知らせることであつた。右衛門を殺すには主君に対する忘恩の罰を責めてそれを口実にすればいいと思つた。

右衛門はたちまち縛り上げられた。その時代は、縛り上げる力

さえあれば理由は要らなかつたのである。右衛門は刑部の前に引き出された。刑部は戦争を始める時の欧州の文明国のように正義をちよつと借りて来た。

「右衛門、おのれは館やかたを見捨てた覚えがあろう、不忠不義者の首はを刎やねて館やかたに手向けるのじゃ」

このくらい立派な理由は、戦国時代の殺人については希有なことである。しかしいくら理由が通つていても、殺される者の苦しさは同じである。否、理由があつて殺される方が、無法に殺されるよりも苦しいことがある。ともかく右衛門は殺されなくなかつた。彼は激しく戦慄し始めた。二、三日前に百姓に殺されかけた時には、相手の方にくらかの威嚇が加わっていたが、今日の宣

告は真実で、まぎれもない実現性を帯びている。彼はどう考えても死ぬということが嫌であつた。彼の過去の生活は安逸と愉悦とにみちていた。彼はこの世の中ほど面白い所がほかにあるとは思えなかつたのである。彼は全身で死を嫌がった。刑部が、

「太刀は惣八郎取れ」といつた時には声を上げて泣き出した。刑部はあざわらつて、

「右衛門、命は惜しいか」といつた。

この返事を考える必要は彼にはなかつた。前の日に弥惣次から教わっているからである。

「命は惜しゅうござる、命ばかりは助けて下され」といつた。刑部の家臣は人間のうちにこんな命を惜しがる者がいるのが不思議

議で堪^{たま}らなかつた。彼らは勇ましく死ぬということが一つの見^み栄^えであつた。だから小さい時から飛行家が曲乗りを研究するように、他人をあつといわせる曲死の方法を研究していた。この頃の武士道の問題は、いかにして生命を安価に捨てるかということであつた。彼らには生命以外のものはなんでも貴^{たつと}かつたのである。生命はなんと交換しても惜しくないものであつた。だから右衛門の哀訴は彼らにとつて、実に奇跡であつた。彼らは一斉にわらつた。刑部はまたからかつてみたくなつた。「右衛門、命は惜しいか。惜しければ手を突いて、惜しいと申せ」といつた。皆はまさか武士ともあるべきものがこれほど侮辱を受けてまで命乞いをすまいと思つた。しかしそれは思つた者の誤解である。右衛門は涙を流

しながら手を突いて、

「命は惜しゅうござる」といった。また君臣の高い嘲弄の笑声が響き渡った。刑部の心のうちには、右衛門の哀訴を聞いて、さらに弄ぼもてあそうという悪魔的な心が生じた。

「それほど命が惜しければ助けて得さそう。しかし、ただは助けられぬ。命の代りに腕一本所望じゃ。それ承知とあらば助けてやろう」といった。太刀取りは右衛門のそば近く寄って、

「殿のお言葉を聞いたか。否か応か、返事せい」といった。右衛門は返事の代りに縛られている左の手を動かした。

「ならば左の手を切れ」と刑部がいった。太刀取りの刀が閃くと、右衛門の手は鈴ヶ森の舞台で権八に切られた雲助の手のようにな

った。

「片手てんぼうでも命は助かりたいか」と刑部がまたきいた。右衛門は恐ろしい苦悶を顔に現しながら頷いた。刑部の君臣はまたどつとわらった。刑部はまた口を切つて、

「片手では安い、両手を切つてなら助けてやろう」といった。右衛門にも言葉の意味はわかつたらしい。太刀取りは、

「否か応か」と聞いた。右衛門はわずかに頷いた。太刀取りの聲が再びかかると、彼の右の腕は血糊を引きながら三間ばかり向うに飛んだ。右衛門の姿は、我々にとつてはかなり残酷に思われるが、戦国時代にはこのくらいな光景を見て憐れんぴん憫を起す人間は一人もいなかった。刑部はまた叫んだ。

「両手でもまだ安いわ。右の足も所望じゃ。右の足を切ったなら、命だけは助けよう」といった。生きた埴輪はにわのように血の中に座らされてゐる右衛門の顔は、真蒼になりながら泣き続けている。しかし緊張した神経には刑部の言葉はわかつたのであろう。彼は切れぎれに「命ばかりは助けて下され」といった。刑部の君臣はまたどつとあざわらつて、この人間の最高にして至純たる欲求を侮辱した。大刀取りは左の手で右衛門の身を上へ持ち上げるようにして右足を剪そいだ。太刀が余つて左足へ半分斬り込んだ。

「右衛門、それでも命が助かりたいか」と刑部がいった。しかしもう右衛門には聞えなかつたらしい。太刀取りは右衛門の耳に口を寄せて、

「命が惜しいか」といった。右衛門は口をもぐもぐさせた。その時、刑部は「それ」と目配せをした。太刀取りは四度太刀を振り直して、えいと首を刎はねた。首は砂の上を二、三尺ころころと転げて、止まった所で口をもぐもぐさせた。肺臓と離れていなくなったら、きつと「命が惜しゆうござる」といったに違いない。

戦国時代の文献を読むと、攻城野戦英雄雲のごとく、十八貫の鉄の棒を芋おがら殻のごとく振り回す勇士や、敵将の首を引き抜く豪傑はたくさんいるが、人間らしい人間を常に miss していた。自分は、浅井了意の犬張子を読んで三浦右衛門の最後を知った時、初めて “There is also a man.” の感に堪えなかつた。

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：鈴木伸吾

2000年1月26日公開

2005年10月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

三浦右衛門の最後

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>